

【子どもの観察例:シモーヌ】(女児 1971年11月23日生;3歳6ヶ月から14ヶ月間の記録)

・1975/05/22・・机の上に置いてあった空箱を組み合わせて何か作品を作ろうとしている。糊で空箱を繋ぎ合わせてゆく。その途中、空箱の表面の文字やイラスト像などに糊を重ねてゆくとそれらが見えなくなることに関心を示す。〈あれっ、隠れちゃった・・〉と言ってる。「イナイ・イナイ・バー」の逆の発想か。こんなことに自由に面白がることに彼女の利発さを感じた。[どこか深い心のうちではくいなくなちまえ!〉というのがあったのだろう。赤ん坊の弟への敵愾心がかすかに見え隠れする。疎外された自分の無力感がこうした‘遊び’をとおして癒されてゆくとはいえよう。]

・1975/06/12・・シモーヌは小柄ながらも気概に溢れている。実に自信たっぷりな物腰で、干渉されるのを毛嫌いし、うっかり手を出そうものなら、大変な剣幕で〈ほっといてよ!〉と怒鳴ってはこちらを牽制する。その一方で、折々私の手助けが必要な際には、いちいち私に偉そうな態度であれやらこれやらと結構命令口調でこき使う。[自分の‘矮小感’など断じて認められないのだ。負けてはならずといつもピリピリしている。時折これはいったい何の‘パワー・バトル’なのかしらと不可解になる。]

シモーヌは、ダニエルが彼女の乗っていたバイクを自分に譲れと迫ってきた折も、全然気後れするどころか、陰しい顔で彼を睨みつけ、断じて屈しないといった趣きである。仲介に入ったプレイヤーのハリエッタがダニエルに言葉を掛けるとすぐさま彼はそれに応じ、シモーヌにはかまわずに歩き去った。つまり彼の負けというわけだ。

・1975/07/24・・教会のホールが或る事情で使えないため、本日のプレイグループは急遽ハリエッタの自宅へと移った。内庭にナースリー・ルーム(子ども部屋)が建てられてあった。かなりのスペースがあり、木馬などもあって、なかなか豪華。そこに設置されていた、子どもの背丈ほどもある大型の『ドル・ハウス』にシモーヌは魅せられた。各部屋ごとにこまごまとした道具が揃えられている。俄然勢いづいてドル・ハウスの中の整理整頓に取り掛かった。まずは保育室にあるものをすべて外へ出し、床を掃く。コットの中から女の子の赤ちゃんを取り出した。それもポイとうっちゃったみたいにして・・。彼女は赤ちゃん用のコットにとっても惹かれたもようで、〈これって、赤ちゃんのためのコットよね〉とか言ってる。私が〈あれっ、赤ちゃんはどこにいったの?〉と訊くと、彼女は〈・・いなくなったの〉と単純明快に答える。自分がしたことには言及を避ける。全然悪びれない。彼女は赤ちゃんの弟がいる。どうやらその存在を認めたくない、むしろ消したいというのがやまやまといったところなのだろう。そこに男の子らがドル・ハウスへ乱入してくる。面白がってドタバタ大騒ぎする。それを見て、シモーヌは早速ハリエッタに告げ口しにゆく。お蔭で男の子らは皆外へ出されてしまう。・・・それから、一人でシモーヌはドル・ハウスの中の各部屋ごとにあるランプ(電燈)はどうすれば点滅するのか、プラグのコンセントの吟味に忙しい。ひどく熱心である。〈(灯りを)付ける・・消す・・〉と口の中で頻りに呟いている。そんなふうにはドル・ハウスの中の各部屋のランプ(電燈)のスイッチのON/OFFの操作を続ける。

〔もしもこのドル・ハウスが「ママの胎内」を象徴するとしたならば、このON/OFFは意味深長である。詰まりのところ、シモーヌがママを監督下に置き、全面的に彼女がママを掌握している限りにおいて、ママの安寧が保証されるということであるらしい(！)。これは本来のところ良き象徴「父親ペニス」の役割なわけなのだが…。それを振り込み同一視したところの彼女の「男の子の部分 boy part of herself」の片鱗が窺われる。ここにおそらくシモーヌがいつかママの補佐役ともなり、真っ当な‘お姉ちゃん’にもなれる芽がありそうだ。〕

・1975/09/18・・・シモーヌはドレッシング・コーナーでロング・スカートを穿こうとしている。欲張って何枚か重ね着する。私が手を貸そうとする。意外にも今日はすんなり受け入れた。顔中いっぱい笑みを浮かべて、ご機嫌である。私は軽くからだを折り、彼女の方にへ腰を屈めていた。この機会を逃さず、彼女は私の顔に手を触れた、親しげなタッチで…。ところが突如彼女の面相が豹変し、敵意に満ちた、邪悪なものとなり、飛び上がって私の顔を引っ掻こうとした。機先を制し、私が軽くそれを押しとどめる。それから、彼女は何事もなかったかのようにジャケットを着て、お出掛けとなる。ちょっと背伸びした装いで、彼女の気分は上々である。こうした彼女の気分のムラにはいつもながら驚かされる。自分よりも幼い子らに対しても同様で、何かの拍子に彼らを攻撃の餌食にしかねない。猛々しく、いつどう雲行きが怪しくなるやら、恐ろしい！の一語に尽きた。

・1975/09/25・・・シモーヌは絵画コーナーで絵の具でお絵描きをしていた。<もう乾いたわ・・・ママのところを持ってゆこう・・・>と言う。彼女は、自分の絵の出来栄えに至極満足したような面持ちである。それでもう一枚絵を描き始めた。それぞれ違う色の絵の具を塗り重ねてゆく。そして徐々に違う色を混ぜ合わせるといったことを試みる。彼女はそれぞれ白と紫の色の絵の具の付いたブラシを手にしていた。そして<ねえ、見て！>と私の注意を引いて、それら2つのブラシの色が混ざる様を見せる。そして突如、決然とした面持ちで、私に向かってそれらのブラシを両手に攻撃する態勢を取った。軽く押しとどめ、なんとか事なきを得る。

〔この事態のどこに彼女の攻撃欲の引き金となったものが隠されているかは謎だ。まさか2つのブラシが‘ママのおっぱい’を連想させたのでもなからうが…。もしかしたらそうなのかも知れない！それでどうやらシモーヌの心で愛憎が紛糾し、どこかで燻ぶり続けていた怨恨の情が火を噴いたということなのか。この点、彼女の‘自由連想能力’は抜群ともいえるし、思考力において利発さは疑えない。ほんとに何を考えているやらとも訝しく思うが、往々にして彼女は收拾が付かなくなるようだ。確かに他の子どもらに比べても、クレヨンでいうなら何十色ものいろんな違う‘感情’を持っているという意味ではなかなか興味が惹かれるものの、何しろその感情表出は苛烈であるから、どうしてもこちらが下手に火傷しない前にくわばらくわばらと彼女から身を引いてしまうことになる。惜しい！〕

シモーヌは、滑り台を使って遊んでいた子どもらの一人であった。彼女は自分の順番を待ちきれず、苛立ってつい列を乱しがち。それで私が、他の子らを押さないでね、と彼女に注意しなくてはならない。

これが彼女を怒り狂わせた。彼女は攻撃性を爆発させ、ついには私を叩いたり顔をつねったりの暴挙に出た。恐ろしい！〔そう言えば、ハリエッタが冗談に、<シモーヌのような嫁さんがいつかウチに来ると思うとぞっとするわねえ>と笑って言ったことがあるのを思い出した。シモーヌ相手に「嫁・姑のバトル」は願い下げだわといったところ。まったくだ！〕

・1975/10/02・シモーヌとジャスティンとが棒切れで戦闘ごっこを始めた。本気になり猛烈な勢いで互いに叩き始めたので、すぐに私が介入し止めさせた。その折、私がジャスティンの方からだを向けていたとき、私の真後ろにいたシモーヌは俄かに棒切れを私の背中にバシッと振りかざした。明らかにしてやったり！という邪悪さに満ちたケタケタ笑いが彼女の顔に浮かんだ。シモーヌの予期せぬ突発的な攻撃性は注目される。この後すぐに彼女の母親が現れた。この時点でシモーヌは2つの赤ちゃん人形を乳母車の中に入れて、世話を焼いている最中であつた。<ちゃんと毛布を掛けてあげなきゃね・・・>とか独り言を言ってる。このようなシモーヌのかいがいしさに優しい一面を認め、母親は相好を崩す。おそらく、我が娘はそんなに悪い子でもなかったかと胸をなで下ろしていたのであつたらう。

・1975/10/24・ミルクサークルの時間、新参者であるアニヤという女の子が落ち着かない。スカートの裾を持ち上げ、彼女のお臍が丸見えとなる。それからパンツを上げ下げする。両脚を大きく拡げて、性器を椅子の角に押し付け、擦り始めた。まったくそれに気を奪われている。周囲がまるで見えていないようだ。傍らのマシューはそれに好奇心をそそられずにはいられなかった。彼女の‘下半身’をじっと凝視している。そして間もなく、彼自身もまったく上の空の風情で自分のベストを引っ張った。同じくサッシャもまた落ち着かないふうにして、その真似をした。それから、私のお隣に坐っていたハイジがドレッシングコーナーで着てきた長いスカートを私に示しながら、<ねえ、見て見て！わたしのペチコート。花柄が付いているでしょ>と何気ないふうに言う。明らかに、私の関心を彼女の‘下半身’へと向けているのは確かであつた。この時点で、そこにいたどの子もアニヤの様子に否応もなく注目していたのは疑いようがない。子どもらはそれぞれに妙に落ち着かない。シモーヌは鼻の穴をほじくっていた。ジェマもまた指しゃぶりに耽っていた。この間、皆どの子も一応おとなしくハリエッタのお話を聞いていたわけだが・・・。誰も直接にはアニヤに向って何をしてるのかも問わないまま・・・。〔素知らぬ顔ながら、その場のどの子も妙に落ち着きの悪い、ある種とても緊張した雰囲気漂っていた。ちょうど3歳になろうとしていた幼いアニヤだが、一方他の子どもらは彼女より年齢は上である。だが、アニヤの自慰的行為が引き金となり、どの子らもそれぞれに自慰空想に浸るさまが垣間見られた。その感染力は凄まじい！〕

シモーヌと一緒に、ジェマは滑り台に上る。そして滑り降りる。これを何度も繰り返す。と同時に、なぜか2人で‘救急車’のピーポーのサイレンの真似をし、喧しくがなり立てている。その大騒ぎに、2人はいとも愉快げに興奮している。なぜ彼女らが‘救急車’を呼ばなくてはいけなかったのかは謎。〔お尻の(性的)興奮がヤバいというわけだったかな？！〕

・1976/01/23・ミルクサークルの時間、シモーヌは当番で来ていた母親の傍らの席に就いた。母親

の膝にもたれかかり、惨めそうな顔つきで、ぼんやりとうわの空で、時折指しゃぶりもしている。しかしながら、リズム遊びの<大きくなろう・小さくなろう>には加わった。その歌に合わせて、皆子どもらは大きく背を伸ばしたり、身を屈めて小さくなろうとしたり、あれこれ仕草を試みる。それで<小さくなろう・>の番になったときのこと。たまたま隣にサイモンが居合わせていて、身を床に屈めていたのだが、シモーヌは突如として攻撃性を爆発し、恐ろしい形相で彼に襲い掛かった。母親を誰か他の子と共有すること、もしそれが幼い子ならば尚更、彼女には耐え難いことであつたらうか。

シモーヌの母親が、嘆息とともに私に語った。<娘は、以前はとってもやさしい子だったのに。弟が産まれてから、まるで変わってしまって…。意地悪げで、気分屋で、みじめつらしい風情で、いつも何かしら訳の分からないものをいっぱい抱えているみたいで。実際誰にも見られていないと思うと、何かしらしてはいけないことをしたりするの>ということであつた。彼女は、私が【タヴィストック】の訓練生であることを承知していたので、<きつとチズコならシモーヌの心の内が読めるんでしょね。本当に、私もあの子の心が読めるものなら、どんなにいいか知れないのだけど…>と憂い顔で嘆くのであつた。

・1976/03/12…そして或る日、私が一週間の休みを経てプレイグループに出掛けた。玄関口で彼女から熱烈な歓迎の抱擁を受け、オヤオヤと思う。ところがしばらく経って、私が庭でサツシャとフラフープで遊んでいた折り、その輪の中に私が捕まったのを目にした途端、すかさずシモーヌは、それを私への敵意と怒りを爆発させる好機としてとらえる。<そいつの尻を、ひっぱたいてやれ！>としきりにサツシャを煽動し、さらには彼女自身が率先して、<おまえは、悪いヤツだ naughty！>と詰(なじ)りながら、必死の形相で私を叩きにかかる。〔愛憎いずれにしてもその過激さには、面食らわせるものがあった。彼女のいう‘悪いヤツ/けしからんやつ(naughty)’というのは、前の週の私の‘不在’を指しているのは明らかだが。そこにどうやら「両親間の性交」が‘投影’されているらしい(！)。〕

・1976/05/14…ミルク・サークルの時間、たまたま私はシモーヌと隣り合わせた。彼女が私に<お手手を出してちょうだい…>と言う。言われたとおりにすると、彼女は私の手をピシャピシャと叩いた。なぜそうなのかの理由は判然としない。ただ彼女がそうしたい気分だつたということだろう。おそらくは、親愛の情の彼女なりの表現ではあつたらうが…。

・1976/05/21…シモーヌとジェマ(半年上)、それにハイジ(半年下)の3人が手提げ袋の所有権を巡って争っている。それぞれ頑固で、断じて譲ろうとしない。どうやらそれはどの子にとっても重大事のように、大真面目だ。ハイジなどはつい負けそうなものだから、涙にくれてしまう。それで、いっとう收拾が付いたのやら、私は知らない。直に彼女らは再び仲良しをしているのを見た。〔この場合の手提げ袋は「母胎」の象徴。それへの執着にそれぞれ彼女らの「母胎」を巡っての占有欲が表れている。勿論‘inner-child(内なる子ども)’でありたい。だがもはや過去に遡るだけでなく、未来形においていつか自らが「母胎」ともなり得るだろう希望の象徴でもあつたらう。そこに彼女らの健全さが窺われる。〕

・1976/05/28・・・ハリエツタがピアノを弾いてくれて、子どもら皆で一緒に歌を歌う時間があった。シモーヌも他の子らとともに大いに楽しんでた。そしてこのすぐ後、彼女は外に出て砂箱に向かった。私がたまたまそこに居合わせたものだから、彼女に「お歌、楽しかった？」と声を掛けた。すると彼女は黙って、砂を一握り私目掛けて投げつけた。何か腹を立てた様子ではまるでなく、彼女の顔にはまだ微笑が浮かんでいたのだが・・・。「このことは、楽しかったお歌の余韻が残っていて、歓びや楽しい感情がまだ無くならないで彼女のうちに保持されていたように窺われる。が、どうやらそれを私に伝えるには明らかに何らかの困難があったもようである。誰某のお蔭で楽しかった（つまりこの場合ハリエツタがピアノを弾いてくれて随分楽しかった）ということが、彼女に「羨望（envy）の念」を惹き起こしたということなのだろうか。大いにあり得る！子どもであるということは彼女にとって屈辱になる。それが彼女の不幸だ。」

ジェマはなにやら秘密っぽいニタニタ笑いで私に近づいた。そして無言のまま、私に挑発的な態度で攻撃を仕掛ける。他の何人かの女の子がこの機会を逃さず、彼女に加わり、私に攻撃してくる。どうやら私を「囚人」として捕らえるということであった。そこにシモーヌがやってきて、何ら言葉を発することもなしに、彼女らを蹴り始めた。私を解放しようとしてくれたというわけである。多勢に無勢であったのだが、彼女は孤軍奮闘し、それも決然とした面持ちであった。「やはり彼女の中には「父親ペニス」の良き象徴が大いに息づいている。「母親」が危機的状況にあれば、シモーヌは俄然献身的な「ナイト（騎士）」となる！即ち、私への「母親転移」であるわけだが、明らかに助けられる側よりも、助ける側に立つのが彼女にはいいらしい。それで日頃の無力感やら矮小感が吹っ切れるということもあろう。」

・1976/06/11・・・外気が冷たくなったので、ハリエツタとサイモンの母親とは外に置いてあったテーブルやら遊具などをすべて室内へと取り込むことに決めた。シモーヌはまだ庭で遊んでいた子どもらに向かって「中に入りなさい！」と叫んでいる。まるで母親の補佐役といった、ちょっと偉そうな感じだった。

シモーヌは乳母車のなかに赤ちゃん人形を入れていた。毛布で包んであげながら、「髪の毛がびしょ濡れじゃないの。風邪をひくわ・・・」と言っている。そして赤ちゃんに洋服を着せようとする。この時点で彼女はとても優しげな「母親らしい」風情なのであった。おそらく実の母親の優しさを彼女は摂り込んでいるといえよう。そして、こうした「ごっこ遊び」においては、彼女になんら心の摩擦は生じないようだ。

シモーヌは、半年ばかり下の女の子のハイジと一緒に机に坐り、紙細工を作っていた。色付きの紙でパターンを切り抜き、それをまた画用紙に貼り付けてゆくのである。シモーヌは机の上にあるものを使う優先権を持っているごとく、ハイジに対してやや居丈高になる。ハイジは臆して、すぐに泣きべそをかく。シモーヌは彼女に取られまいとしてか、大きな鋏をすばやく掴みとる。そして「ママは私がこれを使ってもいいって言ったのよ」と、いかにも自分には権利があると云わんばかり。ハイジはそれに対し、「<でも、皆と一緒に使うのよって言ったでしょ>」と言い返す。「ここでようやく彼女は言語的にシモーヌに反論したことになる。これは素晴らしい！」・・・しばらくそれぞれの仕事に没頭したあと、彼女らの間でごく自然に会話が交わされた。

ハイジ: <私のママはとてもすてきなよ>。シモーヌ: <私のママだって、とてもすてきよ>

ハイジ: <私のママは髪の毛が長いよ>。シモーヌ: <私のママは髪の毛が短い。私もそうよ。あんたは長い髪の毛だね。ジェマも長い髪の毛だよね。あの子、今休暇で出かけてるんだよ>。

シモーヌの母親が、彼女らが紙細工に熱中しているときに一緒に加わった。シモーヌはしばしば母親のことを「ベラ」と彼女のフィーストネームで呼びかけることがあった。母親の説明では、父親の真似をしているということらしい。まるで彼女の態度は対等といわんばかりだ。[シモーヌの母親に対しての競争意識は熾烈と見受けられた。実にこのすぐ後で、ミルク・サークルの時間となったのだが、いつもの慣習として、まず皆が一斉に椅子から立ち上がり、瞬時沈黙するという決まりなのだが、まるで母親を先導するかのよう、<ベラ、立ちなさい！>と言い、いかにも優位に立つ者の素振りを見せた！]

・1976/06/18・・私がやって来たのを認めて、シモーヌは玄関口へ大きな笑顔で駆けてきた。<ハロー！>と挨拶し、私に熱烈に抱きついた。私は彼女の愛想の良さにちょっとびっくりする。[ハリエッタが言うには、かつてシモーヌはほんとに恐ろしく悪意に満ち満ちていたものだから、他の子らに対して危害を及ぼすことを怖れて、彼女から眼を離せなかったんだとか。今彼女は随分と良くなっているわけだ。]

シモーヌは絵の具を筆につけてペインティングをしている。なんだかご機嫌。嬉しそうに一人で歌を歌っていた。……シモーヌはドウ(練り粉)で造形作品に挑んでいる。たまたま私が席を隣り合わせたのを彼女は喜んでいる。愛想よく私に<お一つ、いかが？>とお皿にあったドウ・ケーキのうちの一つを私に差し出す。そして彼女は、他の大人たちにも彼女の手作りのドウ・ケーキを配ってあげることに決める。ハリエッタ、ジャッキー、それにダンのお母さんが当番で来ていたので、彼女ら全員に手渡す。そして皆からありがとうと言われて、彼女の高揚した顔付きは喜びとプライドに溢れていた。しかしながら、ドウ・ケーキを作ってる最中に、彼女は一度だけだが、何かの拍子に彼女の手にしていた料理用のナイフでたまたま身近にいた男の子を叩いた。特にどういう理由もない。外界の事情にはなんら関係なしに、彼女の凶暴な攻撃欲が突如として制御がきかなくなるといった気分なのであろう。きっかけが何であれ、ナイフだったのかもしれない、あるいは彼女の心の内で‘連想’されたなんらかのイメージであろうが……。彼女に関する限り、まだまだ油断はできない気分させられる。

ウエンディ・ハウスのなかで、アニャが料理に没頭していた。ティガーとパトリックがテーブルに就いて、おとなしく料理が配られるのを待っていた。シモーヌはこれに加わった。すぐに彼女はこの‘家族’のなかで‘赤ちゃん’になることを選ぶ。彼女はベッドにからだを横たえ、‘ベッドの中の赤ちゃん’のつもりになる。他の子どもらからのサポートはこの時点で大してあったとも言えないのだが、そのまま彼女はじっとして独りなにやら心を奪われている風情でいる。私が近寄ろうとすると、彼女は<あっちへ行け！>と牽制する。彼女は一人でいたいのだというわけだから、私は歩み去る。そしてしばらくして、私がウエンディ・ハウスの脇を通り過ぎると、玄関口が明らかにバリケードで封鎖されているのを認めた。するとウエンディ・ハウスの中からシモーヌが私の方を目掛けて、<入れてなんかあげないよ！>と脅す。戦闘的な

ムードである。〔確かに赤ちゃんになりたい自分は人の眼から隠したい、つまり心のうちに封鎖しておくのが無難というわけかな(?!)。彼女がすんなり赤ちゃんになりたい自分を認めるのは珍しい！〕

・1976/06/25・・シモーヌは、朝、庭に現れた私を見て、抱きついて挨拶をした。シモーヌはしばらく砂遊びに没頭していた。容器に砂を積めるやらとても集中している。傍らのサツチャが横合いから邪魔するのにも全然取り合わない。サツチャが厄介者なのはいつものことだが。これはシモーヌが自分の攻撃性やら他者の攻撃性に対して耐性が出てきた証しでもあろう。だが直に、サツチャが彼女の使っていたシャベルを横取りしたので、彼女は当然ながら抗議し、それを彼から奪い返した。

私がたまたま手を洗うボウルの近くに居た。シモーヌがやってきて、彼女の足が砂だらけになっていることを私に見せた。そこで私が手を貸して、サンダルを脱がせ、彼女の足やら腕やらを水で洗ってやる。それからテッシュを取りに行き、彼女の手足を拭いてやる。〔私が彼女の世話をしている間、彼女は私をどうやら身を預けても大丈夫な頼れる人としてすっかり受け入れているように感じた。これまでにない画期的なこと。〈距離〉の取り方がうまくなっている！彼女はこうした皮膚接触(スキン・シップ)に我慢できたとし、それ以上にむしろ楽しんでいる。真に私に対して優しげで情愛を込めた態度を感じた。こうして大人から得る手助けを、内心深く屈辱として傷ついてしまうこともなく、喜んで受け入れるといった彼女の態度には実に眼を瞠る思いがした。〕

彼女はお絵描きコーナーで、一人でいた。一枚描きあげたところで、彼女はそれを私のところへ持ってきた。私は彼女の名前を書き入れ、乾かすのに隅っこへと持ち運ぶ。彼女は私の説明に素直に従う。それから彼女はもう一枚描くことにする。絵の具がやや固くなっているのを認め、私が彼女にもうちょっと水が要るわねと言うと、シモーヌは頷く。そこで私が手伝い、彼女が絵の具に水を混ぜる。この間、互いの交流がごく自然でスムーズであり、私としては個人的に、なんて素晴らしい！と感じ入った。

シモーヌがアニャとお喋りしている会話がたまたま漏れ聞えた。砂遊びをしている最中、シモーヌがやや唐突に、〈ねえ、ニールってすてきよね〉と言う。これに対してアニャもすぐさま同意する。〈彼のこと、好き？私もよ！彼って私のことも、好きみたいよ！〉とシモーヌが言っている。それからなおもあれこれ考えがさ迷う。〈ジェマはもう帰ってきてるか？まだ休暇中なのかな。そうじゃないわ、もう戻ってきてるはずよ。(帰宅はしてるけど、プレイグループにはまだ戻っていないという意味。)〉シモーヌはジェマの不在に深く思いを巡らせている。明らかにジェマがいないことを淋しいと感じている。〔好きやら淋しいやら、遊び友だちへの感情が微妙に豊かになっている。彼女の世界はもはや白・黒ではない。いろんな色が混じってカラフルになってきてる。それも以前のようにそれらが渾然として收拾が付かなくなることもなく、一つひとつを丁寧に識別し始めている！〕

シモーヌは、ハイジと玩具を共有するのにいちいち衝突する。例えば木製の荷車。争っている2人にハリエッタが仲介に出た。〈もしハイジに荷車を譲ってやれば、おそらくシモーヌはとてもしいいことをしたこと

になるわね。だって、ハイジはプレイグループをもう今日でおしまいなの。だから荷車をもう使うことはないわけだから・・>と助言した。するとシモーヌはどうやら納得したらしく、それ以上抵抗をすることを止め、ハイジに荷車を譲った。彼女の顔つきはまだちょっと面白くないといった風情が残っていたものの・・。

シモーヌが私のところにやってきて、乳母車が舞台 stage の上からあるはずだから、一緒に探してくれと頼む。そこで行ってみると、確かに一台乳母車が置いてあり、その中にはテディ・ベア(熊さん人形)がいた。するとシモーヌは、決然とした面持ちでしかしごく無頓着にそのテディ・ベア人形をカーテンの裏側へポイと捨てた。<要らないもん・・・>と彼女は言う。しかしながら、すぐに女の子の人形をどこからか見つけてきて、それに毛布も一緒に持ってきた。そして乳母車に人形を置き、毛布でたくし込んだ。とても優しげに愛情を込めて・・。そして満足げな面持ちで、人形を散歩に連れて行った。[ここには赤ん坊の弟(テディ・ベア?)に対する敵愾心は依然として顕著ではあるものの、自分が赤ちゃんでいたいという思いが素直に表出されており、それもさほどの葛藤がない。‘赤ちゃんの自分’を受け入れ、かつそれを抱えんとする誇り高さ‘Big Girl(大きな女の子)’の彼女もまた育まれてきているのだろう。]

シモーヌは、アレクサンドラの妹の赤ちゃんイザベラに興味を示した。母親が当番だから、下の子をも連れてきたらしい。ヨチヨチ歩きしてる赤ちゃんに彼女は近づいた。それからその子のお腹をとんとんと軽く押した。そして直に彼女をやさしく撫で撫でし始めた。それからしばらくして、彼女の手を取り、母親のもとへと連れて行ってあげた。なぜならシモーヌは、きっと赤ちゃんがママに会いたいんじゃないかしらって思ったからなんだと私に言う。これは、彼女にしては上出来。実にすばらしい進歩だと感動した。シモーヌが‘お姉ちゃん’してるのを初めて目にしたわけだから・・。

・1976/07/01・・シモーヌは、庭でお茶会(ティー・パーティー)をすることを思いついた。彼女はお茶の道具一式を持ち出し、庭のテーブルにセットした。それから手洗い用のボウルの水をポットに注いだ。それからカップに水を注いだ。この時点で他の子どもらがやって来て、このティ・パーティーに加わった。そしてティギーやら何人かの子どもがその‘お茶’を口にした。(実際は汚い水だった!)そこでスタッフにお止しなさいと慌てて止められる。此の点、シモーヌが故意であったかどうかは判然としない。私がシモーヌに台所できれいな水を汲みにゆきましよう誘う。彼女はすぐに従った。そして私の後を勢い込んで付き従った。ハリエッタの脇を通りすぎるとき、彼女はくわたしたちはこれからきれいなお水を汲みに行くの>と報告する。私が台所でボウルの水を替えて、庭のテーブルへと持ち運ぶ。シモーヌはそれからカップやら薬缶やらに水を注ぐ。勢い余ってつい水はテーブルの上にあちこちにこぼれてしまう。彼女は大真面目であり、なんとしてでもそのお茶会を仕切るつもりでいたのだ。ところが、傍らにライバルのアニャが居た。彼女もコップに水を注いでいた。シモーヌは邪魔されたと思い、怒る。<あんたはそれしちやダメなんだから・・!>と追い払おうとする。そのお返しに、負けてはいないアニャがシモーヌの背中をど突く。シモーヌはカンシャクを起こす。自分の手に持った杖を振り回し、アニャを脅す。しかしながら、ここで或る事態が勃発する。そこにジョーが登場したのだ。アニャに加担してくおまえなんか、ピクニックに入れてやらないから!>とシモーヌに告げたのだ。これだけでも衝撃なのに、しかもあれやこれやテーブルの

上のままごと道具までも彼らにごっそり横盗りされてしまう。彼らはそれらを抱えて、室内へと姿を消す。そこでどうやらピクニック・パーティをやるということらしい。仲間はずれにされたシモーヌは、＜私は入れてもらえないんだあ・・＞と一人悲しげに気落ちしたようすでピクニック・パーティの成り行きをチラッと眺めながら、なす術もなく呆然と立ち尽くしている。〔彼らはシモーヌよりも1歳ほど年下になる。いつもの彼女なら報復しないはずはない。こんなふうに怖気づく彼女はむしろ奇妙であった。ジョーがアニヤを鼻頂したことにやらショックを隠せないのかも知れない。自分が選ばれないことで傷つくのは、選ばれたいと思い始めているからであろう。なかなか微妙なところである。せっかくの‘お姉ちゃん’のシモーヌもさすがのアニヤを相手には勝ち目がないのが可笑しい。そう言えば、アニヤはいつも男の子らと一緒に乱暴な遊びにも加わるが多いし、負けてはいないわけで、つまりシモーヌと比べれば、幼い彼女の方がぐんと喧嘩慣れしていることになるし、駆け引きもうまい。そんなアニヤにシモーヌが勝てないわけだ！〕

そしてこのしばらく後、ウエンディ・ハウスの中を覗き、そこには幾らかアニヤとジョーにまだ奪われていないものがあつたのを目にする。特に彼女は、小さな赤ちゃん人形がいる揺りかごに気を奪われ、＜揺りかごが倒れている。赤ん坊が寝ているのに・・＞と呟くや、それを起こし、赤ん坊を毛布でいかにも心を込めた手付きでくるんでやる。〔自分が‘いじめ’に遭い、弱き者としての痛みに触れ、それを自ら認め受容したことが、小さい者(赤ん坊)への抑うつ的 depressive 思い遣りへと転じたものであろうか。ここで注目すべきことは、俄然彼女の中に、‘責任意識’が喚起されていることである。素晴らしい！〕

ミルク・サークルの時間が始まる時、シモーヌは小さな敷物を大人用の椅子の上に置いた。＜・・寒いから＞と呟きながら。それからハリエッタの方に向いて、＜あなたのためにしたのよ。ここに座ってね＞と言う。素晴らしい！ハリエッタも半信半疑ながら、今やシモーヌの変化を認めた。

お迎えの時間が来て、玄関先にはサッシャの母親が乳母車に赤ちゃんを連れてきていた。気候のいい日だったせいか、その男の子はほとんど裸んぼであった。シモーヌは興味深々で近づいた。彼女はその子の性器に触った。母親は赤ん坊が傷つけられるのを恐れ、すぐさま彼女に＜ダメよ(No)＞と言う。しかしシモーヌは全然怯む気配はない。悪びれるふうもなしに＜この子、‘シワシワ’があるわね、男の子なの？＞と訊いている。その男の子の赤ちゃんにますます興味を惹かれ、彼女は乳母車の中にあつた哺乳瓶を手にして、彼に与えた。すると＜あら、この子、わたしのこと好きなんだわ・・＞と嬉しげに叫ぶ。おそらく彼が彼女に向かって微笑んだのだと思われる。それから彼をやさしく撫で撫でた。しかし、私は彼女の顔面に時折ある種の凶暴さの徴が浮かぶのを見逃さなかった。それはごくごく僅かであり、勿論それで彼女が何ら行為に及ぶことはなかったのだが・・。〔遅ればせながら、ようやく‘お姉ちゃん’になってきたようだ。これはまずまず本物か。赤ん坊の弟にやさしくしてあげたいというだけでなく、自分も弟に好かれたいという思いが出てきたとしたら、すごい進歩でもある。素晴らしい！〕

・1976/07/06・・私はキッチンでコーヒーを飲もうとしていた。シモーヌがたまたまその辺りにいて、私が何をしているのかと頻りに詮索する。私がコーヒーを飲もうとしているのは見れば分かるのに、＜ねえ、

それ、何なの？>と頻りに尋ねる。それで次はどうするのかと私にいちいち確かめる。特に私が角砂糖をコーヒーに入れるのに興味を抱く。<ねえ、それ何？>と熱心に尋ねる。そこで彼女に一個角砂糖を手渡す。もしそれを彼女にあげなければ、私はケチになるわけで…。〔つまり彼女の作戦勝ち！〕すると、彼女は大喜び。一口かじると、<あらっ、すごい甘い！>と嬉しげに叫ぶ。

シモーヌは新調した服を着ていた。それをひどく意識しているのは明らか。で、私が<とても可愛い服ね>と言う。すると、<おばあちゃんがね、これ私にとって買ってくれたの>と、とても情愛のこもった声の調子で返答する。そこで<あら、そう。おばあちゃんはあなたのこと、とても愛しているのね>と言うと、彼女は言葉では何も言わなかったが、明らかに私の言葉を深く呑み込んだらしく、とても幸せそうな笑みを浮かべた。〔彼女が‘お姉ちゃん’になるのに祖母が一役買ってたというわけだ。素晴らしい！〕

・1976/07/08・シモーヌがやってきて、<ミルク・サークルの時間、わたし、あなたのお隣に座っていいかしら？>と訊く。なかなか親愛の情がこもっている。そこで、<もちろん、お隣にあなたが座ってくれたら、ほんとに嬉しいわ>と私が答えると、彼女は満足げな表情をする。

そしてミルク・サークルの時間。ゾーイという、ごく最近プレイグループに加わった女の子もいた。その彼女の小さな妹も今日は来ていて、ミルク・サークルの輪の中にいた。そしていつものようにミルクを飲んだ後にそれぞれ子どもはカップをテーブルの上に各自戻さなくてはいけないのだが、シモーヌはゾーイの小さな妹にはそれは無理だということを察したらしく、すばやくそう判断し、彼女が飲み終わるのを見るや、彼女を促し、カップをテーブルに置くようにと導いた。彼女の背中をやさしげに軽くトントンしながら…。〔実に‘お姉ちゃん’になったんだなと改めて実感した。まるで奇跡を見るような…。〕

シモーヌは、ニールを伴い、乳母車に2つの人形を入れた。それから彼に命じて‘電話’を持ってこさせた。それらが乳母車に積まれた。そして準備万端整ったというわけで、シモーヌは意気揚々とした趣きで、ニールにくさあて、出かけましょう>と告げた。そこに幼いアレクサンドラがたまたま居合わせて、シモーヌに<どこへ行くの？>と尋ねる。シモーヌは、<あなたは関係ないの>といかにも叱りつけるような物言いで返答し、そのまま彼女を無視し、ニールと一緒に歩み去る。ほどなく私は、彼らが、ホールに隣接してる礼拝堂の玄関口付近にちょうど恰好の‘秘密のお家’を構えたことを知る。運び込んだ荷物、2つの人形、そして2つの電話、それに幾つかの敷物を並べて、いかにも家庭的な雰囲気である。その後の展開はよく分からないものの、どうやら父親役であったはずのニールは間もなく姿を消してしまっている。そしてシモーヌの母親がお迎えに現れたとき、私は彼女をシモーヌの‘秘密のお家’へと案内してみると、残された母親役のシモーヌは一人で実に献身的にその2つの人形の世話に没頭しているのであった。私が、<あら、可愛い赤ちゃんが2人もいるのね>と言うと、彼女は、<違う、赤ちゃんじゃないの。一人は赤ちゃんだけど、もう一人はそのお姉ちゃんなの…。>と返答する。シモーヌの母親はそれをとっても面白い。そして、<赤ちゃんは外では暑かったでしょうから…。>と室内へと連れ戻すように彼女を促す。もう彼女の帰宅の時間でもあったわけだから…。彼女は素直に従う。

・1976/07/19・・・夏季休暇になる前のプレイグループの最後の日であり、ハリエッタはこの日をもってプレイリーダーを引退することになっていたので、自宅でパーティを催した。ジェマとシモーヌ、それに他に幾人かの子どもらがプレイグループを去ることにもなっていた。ジェマは可愛いパーティ・ドレスに身を包んで現れた。もったいぶった風でいかにも得意げである。意気揚々としている。彼女は、短めのスカートの裾を両手で持ち上げて、自己陶醉したふうに、くるくると回り始めた。ところがその最中、ふとそうした彼女を見ている私の視線に気づいた。そしてちょっとごちなくごまかし笑いをくすくすとした。そこで、ふと何か彼女の心にひっかかった思いを私が‘翻訳して’言葉にした。すなわちくあらあら、お尻が丸見えだったわね>と・・・。ジェマは真っ赤になり、早速それを近くにいたシモーヌに告げ口した。私が彼女に対して大変不躰なことを言ったということわけだ。<けしからん naughty・・・！>と、シモーヌは私をキッと睨む。そこで2人がかりで私を標的にして、懲らしめんと追掛けてきた。ギャング化したとも言えるが、どちらも自分たちに正当な理由があることで戦意を高揚させていた。私は早速退散した。

ジェマとシモーヌは赤ちゃんの乳母車の所有を巡って二人で猛烈な口論をしている。どちらも<私が欲しいんだから・・・>と譲らない。2人とも同年齢で、力量でも根性でも互角。それで結局どう落とし前をつけたのか知らないが、直に2人がまた仲良しになっているのを認めた。どうやら大人の介入なしに彼女らの間で決着を付けた模様だ。〔乳母車は(手提げ袋にも似て)「母胎」の象徴。こちらで彼女らの「母親同一視」にはますます拍車が掛かってゆく。そうして‘外なる子ども outer-child’の気概とともに、性同一性が揺るぎないものとして固められ、彼女らの‘未来の母性’の礎が築かれてゆく。〕

おやつに凡ての子どもらにアイス・キャンディが配られた。その後でハリエッタがリズム遊びを取り仕切った。その興奮の渦の中で、シモーヌは不意にティギーという幼い男の子の顔を引っ掻いた。特に表立った理由もなさそうだ。ハリエッタが<そうしちゃ、ダメなのよ>とシモーヌに注意するという一幕があった。ほんとに最後の最後まで、ハリエッタのシモーヌへの懸念は消えなかったということになる！

【補記】

シモーヌという女の子は黒褐色の短めの髪の毛で小柄、そして可愛い風貌なのだが、表情は固く、普段ニコリともしない。譬えるなら「雷神の子ども」といった風情で、彼女はいつも体中がピリピリしていた。ひょんなことで何ごとかが心の葛藤に抵触するや、ピカピカと閃光を放った！下手に触れば、こっちが火傷しそうで、怖くて触れないといった印象なのだ。彼女の気の昂ぶりは、突発的で予期するのは困難でもあった。こちらの対応はつい後手になりがちで、だからわれわれスタッフとしても警戒を怠らないようにと用心する恰好になる。張り詰めた彼女の小さな体に潜む‘遺恨 grudge’は尋常ではなかった。それがどうやら弟の誕生に起因するらしいのだが・・・。

ここで【ロバートソン・フィルムズ】の分離不安の子どもたちの中の事例「ジョン」が想起される。彼の場合、母親が出産のため入院した際乳児院に預けられたわけだが、シモーヌの場合、その間どのような

ケアを受けていたのか知る由もない。とにかく何かしら重大な‘傷つき trauma’があったとしか思えない。ジョンがそうであったように、シモーヌの親に対しての‘意趣返し’が執拗に続いている。あのやさしい娘のシモーヌが何故にと、家族は誰しも憂い顔であった。ジョンにしてもそうだった。母親との愛情の絆が強いだけに、弟妹は飽くまでも許し難い‘小さな闖入者’でしかない。自分の座を奪われた、そして親たちから疎まれたという傷つきは癒し難い。その鬱憤は生まれたばかりの弟に向けられるとしても不思議ではない。敵討ちなのだから・・。そしてプレイグループの幼い子どもらも同様に、シモーヌの攻撃の‘餌食’になった。ハリエッタを始め、スタッフの誰もが巻き添えをくった。だが、まさにこの‘転移状況’は案外シモーヌにとって大いに利があったと思われる。そうした彼女の攻撃性は発散される機会を得たのであるし、同時に徐々に水路付けもされていったのだから・・。‘お姉ちゃん’になりなさいと彼女に命じることが誰にもできはしないのだ。ただシモーヌの場合、母親側の‘傷つき hurt’、すなわち悲しみやら憂いやらをともなった共感に支えられながら、その頑なさやら苛烈さが徐々に緩められ融かされてゆくのをわれわれは時間を掛けて待ったといえよう。

愛の対象 Love Object が意思を有すること、自分とは別の誰かとの親密な関係を持つことへの敵愾心は、おそらく当然ながら裏切られた・騙されたといった恨みの情にならないわけではない。抗がいながらそして逆らいながらも、シモーヌは Love Object である母親が意思を持つことを許していったのかもしれない。〈距離〉を受容し、ついに家族の輪の中へ立ち還ったとも言える。繋がりの中で自分を抱きとめてくれる誰かがいる、自分の中に大事に抱える誰かがいることを彼女は悟ったのだろう。彼女の‘2つの電話’がそれを象徴している。そして彼女は自己意識を持ち、己れを責任あるものとして抱えることを徐々に学んでいったのだ。家族らの尽力が、祖母なる人も含めて、大いに俵ばれる。そしてハリエッタを始め、プレイグループのスタッフらもまた大いに貢献した。とにかくにも彼女は折折に目の前の‘良い対象’を摂り入れ、頑迷かつ凶暴な己れ自身を牽制するための味方とすることが出来た。かくして彼女の変貌は遂げられたのだ。彼女の生来の気質が粗暴ではなかったということにもなるだろう。とにかく彼女はまずまず救済されたといえよう。彼女に関わったわれわれ誰しもが報われた思いを抱いた。‘お姉ちゃん’になることも悪くないとシモーヌが思い始めたのには内心胸を撫でおろす思いであった。

セラピーでも往々に経験することだが、その終了に当たり、セラピストとの別離に際し、分離不安による攻撃性・破壊性が再燃し、噴出するものだが、シモーヌの場合も、ハリエッタとの最後のパーティではそうであった。プレイグループの新参者でもある幼い男の子に向って攻撃欲が一瞬暴発した。やむを得ないことだ。このような経緯で pre-school 時代を過ごしたシモーヌは、次のステップへの心の準備が辛うじて出来たのではないか。ほんとうに幸運であったと言えよう。勿論、いつか将来彼女がセラピーを受けるチャンスがあれば、それもよからう。まだまだ窮屈で融通性がないのが気掛かりだ。大いに泣いて笑ってを繰り返しながらも、彼女の中に鮮やかな‘心の色 color’がさらにたくさん増えてゆくといい。

(2013/11/11 記)
